

幼児の観察教育について（第四報）

ニワトリの観察教育における限界について

広島女子短期大学 山内美子
広島・大手町幼稚園 中本多美子

幼児が動的なものに興味を抱くので、本報では鳥類をとり挙げた。鳥類は童謡、童話で幼児に親しまれている。特にニワトリは形体が大きく、食生活にも密接な関係があるので、幼児の観察対象とした。

鳥類の観察は禽舎の広狭によって、形体の把握に変化があるか否か、検討したい。

調査対象 就学前児の親子二五六組を広島県下の山間、都市、沿岸部の3地域から選んだ。地区に無関係に保育者二一名をも参考に対照として、保育の盲点を探ぐろうとした。

調査方法 A 描画—幼児には鳥類の想像画を、保育者にはニワトリの記憶画を描かせた。B 調査用紙—園児を通じて保育者に依頼した。その大要は、家族の動物に対する興味飼育動物の種類、世話などである。幼児画と調査用紙は一組として考え、組にならないものは除外した。C 幼児の観察画—一、二回目の観察は狭い鶏舎中の生息を観察させ、保育室で描かせた。三回目は園庭に放した状態を観察させ、その場で描かせた。四回目は主として頭部に注意を向けさせた後、描画させた。

処理方法 九〇%の信頼限界で処理した。

調査成績 A 記憶画—成人画と幼児画の比較…目、鼻、耳、二

本脚、四本趾は両者間に有意差は認め難い（第1図No. 1, 2, 3.）。

幼児画…a 地域差—翼は都市が他地域より低率であり、目は沿岸部が山間部より低く、正誤を問わず脚、趾、尾羽を描いた者は山間部が他地域より多いと各有意差が認められる（第II図）。

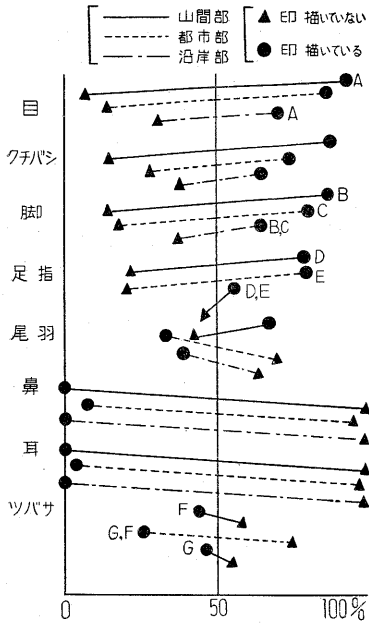
b 鳥の飼育状態との関係—沿岸部が僅少であると有意差が認められたので除外した。各部とも両家庭間に有意差は認め難い。

B 幼児の観察画—一回目は依然として四本脚、三・五・六本趾が多く、二回目も同様であるが、尾羽が表われた。三回目は真正面から描いたり、翼、鼻孔が表われた。四回目は主に頭部に注意を向けさせたところ、耳に気づいたが描画には表われなかった。

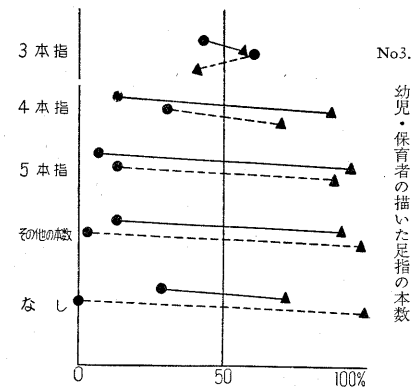
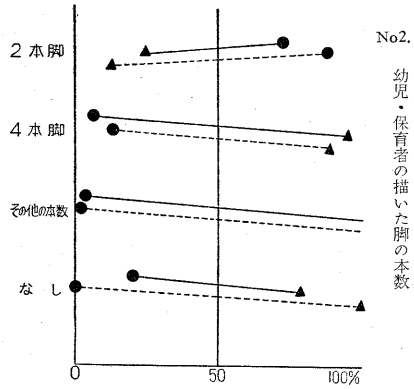
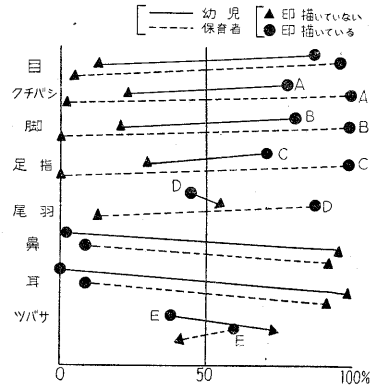
考察 A 記憶画—幼児の鳥の飼育家庭如何に拘わらず趾を三本に描いたことは、幼児の観察態度が福田が述べるように、細部に対して無頓着なのか山内がいうように観察不十分なのか、想像画では不明である。翼、尾羽の表現が他の部よりも低率であるのは、一般に色合、形態などが体部と区別がつき難いために幼児の注意をひかなかつたように思われる。沿岸部の成績が悪いのは、鳥類を近くでみる機会が少ないのが原因ではないだろうか。成人画については速断になり易いので、次報にゆずりたい。

B 観察画—実物を観察しても一回目は四本脚、三・五・六本趾を、二回目は五・六本趾は消失したが、以然して三本趾である。しかし趾の機能について幼児と問答をした後、園庭で描かせると、四本趾が多く表われた。更に翼、鼻も描画された。以上のことより幼児が細部を描かなかつたのは、無頓着というよりは、観察不十分であり、各機能についての認識不足と思われる。「見る」「聞く」機能は人間が誕生して間もなく完全になるが、単に「見させ」「聞かせ」たのみでは正しい観察態度は養成されないようである。

第II図 幼児の描画に表われた各部の割合



第I図 No1. 幼児・保育者の描画に表われた各部の割合 信頼限界は90% 同符号は有意差のあることを示す



鳥の種類を問わず禽舎は大きい程、鳥類の生態・形体の観察ができる上に描画指導にもなるからよい。即ち園庭に放して描かせると、今まで横向きに描いていたのが正面からも描いた。幼児の絵は「フロンタリティの法則」といわれるが、本観察はこの法則を打破したことになる。

ケツメや歯のないことに注意を向けた者は一人もいない。ケツメを有する鳥は「ニワトリ」の他、キジ、クジャクのような飛ぶ力が弱く、地上を歩く「ニワトリ類」の雄のみであり、歯は何れの鳥にもないが、これらを図解してまで気づかせる要はないと思う。鳥類の四大特徴を理解させたいと思う。

- 文献引用 1) 山内美子—広島女子短大研究紀要第一号 P 八四—一九六一
 2) 福田邦三—日本生理雑誌一卷四号 P 一七五—一九三六
 3) 山内美子・小沼ゆう子—広島女子短大研究紀要第一〇号 P 二四—一九六〇

附記 保育者の記憶画については、幼児の観察教育の盲点について、と題して既報をまとめて次会で発表する予定である。

幼児の色の好みに関する研究

川村短期大学 帆足喜与子

吉田洋子

幼児の色の好みの傾向を知るために、昭和三四年及び三五五年の真夏に次のような調査を行なった。赤、黄、桃、黒、青、紫、緑、肌、茶、黄緑、白、橙の十二色の色紙の中から最も好きな色を上げると約束して選ばせた。自分のものにするこよって、好きな色と適確に選び得ると考えたからである。対象は、四、五、六才男女計一四九八名で、地域は北海道から九州にわたっている。民族的な関心から、アイヌ人及び日本在住のアメリカ人をも調べてみた。

色の好みに年齢差があるであろうか。統計的に有意義な差は見出されず、特に女子にその差が小さい。ただ目立ったことは、男子の四才から五才にかけて赤を好むことが減少し、黒、紫が逆に増加していることである。

さて、男子と女子の色の好みを見ると、男子は青を、女子は赤を著しく好んでいる。そして男子は、桃、橙、肌が極めて少ないことを除いては好みか女子に比しかたよっていいない。女子に好まれた色は赤か黄、桃の三つの暖色が非常に多い。それに次いで橙、次いで肌色が好まれているが、他の色は目立って少ない。(第一表参照)

	男	女
赤	48	205
黄	74	109
桃	8	142
黒	80	9
青	153	33
紫	89	25
緑	87	27
茶	46	7
黄緑	46	18
肌	13	52
白	43	51
橙	13	77
	720	750

第一表
色の好み(男女別)
(全国)

	男	女
1	青	赤
2	紫	桃
3	緑	黄
4	黒	橙
5	黄	肌
6	赤	白
7	黄緑	青
8	茶	緑
9	白	紫
10	肌	黄緑
11	橙	黒
12	桃	茶

第二表
好まれた色の順位
(全国)

季節によって好み異なるかをみたところ、男女ともに春に緑が多く生まれ、夏に男子に青、女子に白が多い。また春に女子に桃が非常に好まれている。このようにして、季節によって色の好みの異ることが統計的に有意義な差をもって示された。

地域による好みの差を見るために、東京以北、東京、東京以西の三つのブロックに分けて比較した。男子においては統計的に差はないが、相応にちがいはみられた。女子においては、東京において、青、緑が生まれ、橙が好まれず、東京以北では、茶が他と比べ割に上位にあること、東京以西では白が上位にあることが目立ち、地域的に有意義な差が見られたのである。東京では、他地域に比しやわらかい色が上位にある。

民族別にみると、男子の場合、殆ど差は認められないが、女子の日本人(北海道小樽の日本人)とアイヌ人と比べると、後者が黒、